

プロローグ

昔々のまだ魔物が多く、人々が怯えながら暮らしていた時代。

あるところに、ひとりの貧しい少女がいました。

村人全員が持つ魔力を持たない少女は何をしても上手くできず、誰から必要とされないままある冬の日、とうとう森へ捨てられてしまいます。

雪の降る夜の森を、少女はひとり歩き続けました。

帰る家もなく。

迎えてくれる人もなく。

それでも生きたいと願いながら歩き続けましたが、とうとう力尽きて雪の上に倒れてしまいます。

ここで魔物に喰われて死ぬのだ。そう目を閉じた時、眩い光が少女を包み

込みます。

恐る恐る顔を上げると、そこには美しい神様が立っていました。神様は少女に問いかけます。

「心清らかで哀れな娘よ、何が欲しい」

少女は少しだけ考えてから、こう答えました。

「帰る場所が欲しいです」

すると神様は悲しそうに微笑んで言いました。

「ならば、お前が誰かの帰る場所になりなさい」

神様は少女に祝福を与えました。人々を癒し、救う力です。

少女は言いつけの通り人々を癒し、苦しむ者を救い、多くの人に愛されるようになります。

行き場を失った人々は少女のもとへ集まりました。

傷付いた人も。

悲しみに暮れる人も。

孤独な人も。

少女は誰ひとり拒まず、その手を取ったと言われています。

やがて長い年月が過ぎ、少女がその生涯を終えようとした時。

再び神様が現れました。

神様は優しく問いかけます。

「お前はもう迷子ではないか」

少女は穏やかに微笑みました。

そしてこう答えたのです。

「はい。ここが私の帰る場所です」

その後、少女は光に包まれて神様のもとへ旅立って行きました。

少女の死を多くの人が悼みました。そして多くの人の帰る場所となった彼女を聖女として祀る事にしたのです。

少女を愛した神様はこれを喜び、自分の力をほんの少し分け与えた人間を創る事にしました。魔物を倒す魔力ではなく、人を癒す神聖な力を与えたのです。

その力を賜ったものはいつかまた神様が選んだ乙女がこの国に現れると信じ、修道院を建てて祈りを捧げるようになりました。いつでも、清らかな乙女の帰る場所となるために。

——…この国に古くから伝わる聖女の伝説。

わたしは子どもの頃からこのお話が大好きだった。魔力がない自分も、もしかしたら救われるかもしれないと思えたから。

魔物が減り、魔力は貴族の特権となった。権力と血統を証明する力に他ならない。

では権力と血統を示すことができない貴族は、一体何ができるだろう？
何もない。何もできないのだ。それでも男児であれば兵士となって国の為に働くことができたのに。

不必要に育った重い胸が恨めしい。せめて今日の見合い相手が、わたし自身を見てくれる人でありますように。

叶うはずがない願いを込めて、朝日を目蓋で受け止めた。



秘密を抱えるだけの共犯関係
だったはずなのに、
最強の大司教様は偽り聖女の私を
一生手放す気がないようです

「……っ！」

「親に向かってなんだその態度は！」

神聖な空間に似つかわしくない父の怒号に、黙って頭を下げる。

視界を占めるのは神殿の磨き上げられた象牙色の床と、そこにぼんやりと映る、今にも泣き出しそうな自分の顔。

——ひどい顔……

やつれた顔は貴族令嬢とは思えぬ血色の悪さで、表情からは年頃の少女らしい幸福感が抜け落ちている。

……一晩中叱られていたら、誰でもこんな顔になる……はずね。

両親のどちらにも似なかった髪は燦んだ濃い金色で、毛先にいくにつれて

カサついていた。

「本当に愚鈍な娘だ。せめて愛嬌があればいいものを……どうせ昨日の見合
いでも、その不幸そうな顔をしてお相手の興を削いだんだろう。初婚であれ
ばいいと言ってくださった相手だというのにお前ときたら……」

緊張の中で怒りがぶり返したのだろう。昨夜何度も聞いた言葉が、清廉な
空間に反響する。

一睡もしていないせいで頭が重い。鈍い頭痛に耐えながら目を伏せた。
力が弱い子爵家の娘に与えられた役目はひとつ。少しでも良い家に嫁いで
子を成すこと。

けれどわたしはもう十八になるというのに、婚約者さえいない。いくら縁

談を組んでも魔力が無いせいで破談となってしまうのだ。

……生まれた子どもも魔力無しだったら、困るものね。

元々お世辞にも良いとは言えなかった扱いは、今では更に悪い。

見合いがない日は一日中部屋から出ることを許されないし、食事抜きは当たり前。

——……身体を売ってお金を稼げと言われないだけ、まだマシよ。お父様なら言いかねないもの

ぎゅ、と唇を噛み締める。口の中に苦い物が広がって気持ち悪い。

——そんなの、絶対に嫌。……身体目当ての相手と結婚させられるくらいなら、遠くの修道院に入った方がずっと良い。だからどうか、どうかお願い。細く息を吐きながら床を見つめる。

ほんの少しでも、わたしに神聖力がありますように……！

だだっ広い神殿に響いた父の声が完全に消えた頃、代わりに静かな足音が響いた。こつ、こつ、と少しずつ大きくなっていく。

「——どうぞ、顔をあげて」

低くなめらかな声が腹の底から震えるような威厳と、それを薄く覆う穏やかさを持って空間に響いた。

隣で父が頭を上げた気配がして、倏って顔を上げる。

……わ、……

なんて美しい生き物なんだろう。

真っ先に抱いた感想は、恐れ多くもそれだった。

腰の辺りまで流れる銀色の髪は、神殿に降り注ぐ穏やかな陽光を浴びて輝

き、緑の瞳は深い森のように色濃い。形の良い眉と唇が完璧な位置に収まっている。名のある画家がその腕を振るつたとして、きつとこの高潔な美しさはとても描き起こせない。あまりに整いすぎていて、人というより神話の登場人物みたいだった。

壇上にいるとは言え、白いローブに包まれたその体軀は見上げるほど大きく、それが彼の威厳をより強固なものにしていた。

彼こそがこの国の歴史の中で最も神聖力が強く、神の声さえ聞くことができると言われている大司教グレイン様だ。

「お待たせして申し訳ない。私が大司教グレインです。話は聞いています、そこのご令嬢が？」

「……はっ、はい！」

遠い西の地の訛り。それに狼狽えた父が、わたしの頭を押さえつけた。

……痛、……っ

貴族としてその振る舞いはどうなのかと言いたくなるけど、そうでもしないと大司教様が発する圧力に押し潰されてしまいそうだったのだろう。許したくはないが、今更怒る気にもなれなかった。

「この子は貴族が生まれながらにあるべき魔力が少しもございません」

喉の奥がざらりと乾く。

何度聞いても欠陥品だと言われているようで、気が重い。

「その所為で纏まる縁談も纏まらず……せめて神聖力があればと思い、こちらに連れてきたのです」

「……なるほど」

気配だけで、あの深緑色の瞳がわたしを捉えたのだと分かる。

息苦しいほど強い神聖力が漂っているせいか、頭を押さえ付けている父の手が震えている。父の浅い息遣いばかりが響く静寂に、わたしの胸にはどんな焦りが生まれていた。

……だめ、無理よ。わたしにこれと同じ力があるはずがない……

神聖力がなければ修道院には入れない。絶望に揺れた息をなんとか噛み殺す。父が縋るような声をあげた。

「さっ、幸いにも今まで男の気配もなく、まだ処女^{おとめ}。可能性はゼロではないのではと……！」

「——……ふむ」

全身がカッと熱くなる。恥ずかしさで震える手をぎゅっと握りしめた。どうしてそんなことをわざわざ人前で言われなくちゃいけないの……！衣擦れの音がして、こつ、こつと足音が近づいてきた。俯いたままの視界のすみに、曇りひとつない革靴が入り込んだ。

「自分、名前は？」

聞き慣れないイントネーションが指す単語の意味がわからない。

……自分？ 大司教様の名前は、グレイン様……のはずだけど……
なんと答えるべきか迷っていると、頭に乗っている父の手が髪をぎゅっと握りしめた。

「ッ……！」

「申し訳ございません……！ 察しが悪い娘で……」

「ああ、堪忍ね。自分っちゅうのは、貴女のことや。貴女、名前は？」

とん、と頭に軽い衝撃が来た、と思った瞬間、父の手が飛び退くようにして離れた。引き攣る痛みが失せ、頭が軽くなる。

……？ なんだったのかしら、今の……

恐る恐る頭を上げると、そこには優しい、全てを包み込みそうな穏やか

さで微笑む大司教様が居た。

「名前、言えるか？」

「あ……っ、イリスです。イリス——」

「ああ、家名はいらんよ。もう必要ないさかい」

「え？」

どういうこと？

その疑問を口にするより早く、大きな手がそつと頭を撫でる。髪の毛の表面を撫でて、そのままパサパサになってしまっている毛先に触れた。

——……え？ あ……な、に……？

肌には触れられていないはずなのに、肌がじんわりと熱を持つ。特に下腹

部の奥がずくと鈍く疼く奇妙な感覚に、背筋が震えた。

「……ああ、間違いないわ。イリス、今日から俺のところで修行し」
「え？ あ……っあ……」

今の今まで絡まった粗末な糸みたいだった髪が、絹糸のような輝きを取り戻していた。

どうして？ 大司教様が触れて……触れてくださったからなの？ そんな……まるで。

奇跡。それ以外にあり得ない。
もう二度と戻れないと思っていただけに、喜びが溢れてくるのを抑えられない。

思わず父を見ると、どうしてか父は顔を真っ青にしてブルブルと震えていた。

「お父様……？」

「ひッ」

「……気にせんでええよ。イリスが急に綺麗になったもんで、驚いてしまわれたんやろ」

「そうですよね？」と問われた父は勢いよく何度もうなずいた。

……どうしたのかしら。冷や汗までかいて……まるで何か恐ろしいものを見たみたい。

まさかわたしの顔にも何か変化が？ と急いで頬に触れてみたけど、何か

が変わった様子はない。肉は薄く、肌はほんのりとカサついたままだ。

「心配せんでも、綺麗な顔のままやよ」

「あ……い、いえ、申し訳ございません……！」

「謝らんでええ。……で、お父上」

「ひっ……は、っはい……！」

スッと姿勢を正した大司教様が、冷たく目を細めた。

一瞬で周りの空気が冷えて、身体が地面に引っ張られているかのような重圧を感じる。そのせいなのか、それとも大司教様の背が高すぎるからなのか。決して小柄とは言えない父が、情けなく矮小な存在に見えた。

「ご息女は今この時から神殿の……私の預かりになります。そうなれば二度と俗世には戻れません……異論は？」

「い、いえ、ございません……！　元より辺境の修道院か、遠い親戚の領地に送ろうと思っていた娘です。大司教様の預かりになれるのであれば、願ってもないこと……！」

あつさりと娘を手放す父に、胸がぎしりと嫌な軋み方をした。

——……分かっていたはずなのに、やっぱり辛い。お父様にとってわたしは要らないお荷物だったのね……

捨てられるのと、自分から離れるのとでは悲しさの度合いが全く違う。

わたしは今、実の父に捨てられたのだ。喉の奥がズキズキと痛んで、瞬きをすれば涙がこぼれてしまいそう。悲しいのか、悔しいのか、自分でも分か

らない。ただ唇を嚙んで、俯かないようにするので精一杯だった。

「では決まり、と言うことで。……イリス」

「……は、はい」

ふ、と空気が緩む。一転して穏やかな表情で大司教様は口を開いた。

「今日から自分が帰る場所はここや。ここで俺と一緒に、仲ようしような」

すべてを救ってくれそうな穏やかな目と声。今すぐ飛びついて泣いても、許してくれそうだった。

——……だめ、泣いちゃだめ。

込み上げてくる熱い涙を飲み込んで、深く頷いた。

「……どうぞよろしく、お願いします」

手を前で揃えて深く頭を下げた。

貴族の娘としてのわたしは、もうおしまい。だから膝を折ってする、貴族の挨拶はしなかった。

満足そうな吐息が聞こえる。静かなはずの神殿に、爽やかな風が一筋流れた気がした。

別れ際、父の顔は見なかった。

向こうからの声かけもなかったし、別れの言葉も思いつかなかったから。わたしは自分で思っていた以上に、薄情な人間だったみたい。

父と別れてそのまま神殿の中を案内してもらおう。

祈りを捧げる広間を除けば、造り自体は修道院とそう変わりはない。ただ数人の下働きの人が住んでもまだ余裕があるほどに広く、実家よりも遙かに立派だったけど。

大広間にある美しい花瓶など、もし実家があれば家宝扱いだろう。

「……で、ここが寝室なんやけど」

「ここが……ですか？」

建物の中で最も奥まった場所に存在する扉の前で、大司教様が目を細めた。

「そう。イリスの部屋や。気に入ってもらえるといいんやけど……なんか不便があつたら、遠慮なく言いや」

「そんな……勿体ないお言葉です」

なんてお優しい方なんだろう。お辞儀をしながら、そう思った。

行き場を無くしかけていたわたしを無条件で拾い上げてくださっただけじゃなく、気遣いまでしていただけるなんて。

聖女伝説の神様みたい。そんな冗談が頭に浮かぶくらいには、心が躍って

いた。

「堅苦しいこと言わんで。ほら、入り」
「ありがとうございま、——」

しかし重い扉が開かれた先、そこに広がった光景に息が止まった。

——え？　これは……どういうこと……？　わたしの、部屋？　と言うにはあまりに……

本棚からあふれて床に積み上げられた分厚い書物、ソファの背もたれに引っ掛けられた服、そして大人が三人は余裕で寝転ぶことができる大きなベッド。どこからどう見ても、先住者がいるように見える。それも多分、男性の。

「ああ、堪忍な。朝起きたまんまやから、散らかつとるわ」

「えっと……？」

「ん？ ああ、自分綺麗好きやった？ ほなちよつと不便かけるかもしれんけど……慣れてってな」

何かを問う前に背中を押されて部屋に踏み込む。後ろで扉が閉まる重たい音がした。

「あ、あの、大司教様」

「なん？」

「その……部屋をお間違えではありませんか？ ここはその……もうどなたが使っているように見えます」

他人の部屋をじろじろと見るわけにもいかず、大司教様だけを見上げる。
きよとん、と深緑色の目を不思議そうに瞬いたあと、おかしそうに笑った。

「そろそやや、俺の部屋やもん。今日からは自分の部屋でもあるけど」
「え!？」

どういうこと……？ 言葉のまま受け取るなら、彼と相部屋だということになる。

いくら聖職者だからと言って、男性と同じ部屋で暮らすのはかなり抵抗がある。男性と手を繋いだことさえないのだ。同じ部屋で寛ぐなんてできるとは思えない。

ここしか部屋がない、なんてことはないはず。物置部屋でも構わないから、どこか別の部屋にしてもらいたい……！

「あ、あの、大司教様」

「グレインでええよ」

「……グレイン様。あの、物置部屋でも構いません。どこか別の……」

言葉を無視するように、頬に乾いた指が触れた。すり、と耳朵を撫でて、今度は首筋をなぞった。長い指が行く先に嫌でも意識が向いてしまう。

グレイン様の指が鎖骨と鎖骨の間に届いた直後、そこから一気に熱が流れ込んできて、びくと肩が跳ねた。

「別部屋なんかあかんよ。自分は俺と一緒におらんと……」

「え……どうして……」

低い声で呟きながら、ドレスから覗く胸元をくすぐる。

——……いや、だめ。これはだめ……！ 男の人にこんなところを……っ
聖職者だからと油断していた。男性と個室に二人きりになるなんて、今までだったら絶対に犯さないミスだ。浮ついていた心が一瞬にして凍る。その手から逃れようと身を振った。

「あ、あの……っおやめ、くださ……」

それなのにグレイン様の指が鎖骨をなぞった瞬間、胸の奥からじわりと熱

が広がって、続きの言葉を飲み込んでしまった。

……っ？　なに、これ……変な感じ……熱くて、なんだか……心臓を直接炙られているみたい……、……っ

頭では拒んでいるのに、肌にチリチリと熱が走ると胸が甘苦しくなって抗えない。

むずむずと落ち着かない感覚が怖くて顎を引くと、それを叱るように腰を抱き寄せられた。

「……っ！」

「どうして？　それはなあ……」

顎を指で優しく掴まれて肩が竦んだ。勿体ぶった言い方に思わず眉を顰め

ると、彼は威嚇する子猫を見るのと同じ顔で笑った。そこにさっき見た清らかな色はない。捕まえた獲物をどう甚振るか考えている、捕食者の笑み。そして、おそらくは素の表情。

「自分が俺の“器”^{うつわ} やからやよ」

「うつ、わ……？」

「そう、この世界にたった一人の器。俺のこの力を受け止められる唯一の存在」

さも愛おしそうに頬を撫でる彼に、ますます眉が寄る。

この人、なにを言ってるの……？

太い喉が震えて、愉快そうな吐息が鼻先に触れた。

「俺のこの力な、大きすぎてあかんのや」

「え……？ それは……どういう、ことですか……？」

神聖力なんて、大きければ大きいほど良いのではないか。

だってそれは神に授かったものなのだし、強ければそれだけ人を救える証になるのだから。

そんな心の中を読み取ったのか、形のいい唇が柔らかな声を発した。

「自分も見たやろ？ 俺の一挙一動に慄いて震え上がってたあの父親を」

ついさつき別れたばかりの父だった人を思い出す。

グレイン様が何かを言うたびに、悲鳴にも似た声で返事をして、叱られた犬の如く言いなりになっていた中年の横顔。

——……あ。

そこまで言われてようやく気がついた。あまりに強い力はそれだけで畏怖されるのだ。恐れを抱く相手に、どうして救いを求められるだろう。圧倒的な力というのはそれだけで恐怖の対象で、人は怖いものには近づけない。

「いくら言葉を直して態度に気をつけてても、人は俺を同じ人間やとは思えん。大司教の立場があるから仕事としての依頼はようけ来るけど、それ以上の関わりを持つとはせんのか」

「それは……」

「おかしいやろ？ 姿形は自分らとおんなじやのにな」

飄々と語る声にはどこか諦めが滲んでいて、遣る瀬ない。軽やかな声の中に彼の孤独が垣間見えた気がした。

——本当なのかどうかを確かめる術はないけど、嘘ではない……と思う。なんとなくだけど、そう思う。信じたいだけなのかもしれないけど……同情にも似た感傷が頭を擡げた時、声音が溶け始めた飴の如く異様に甘くなつた。

「せやけど自分を見つけた。ずっと探してたんや」
「え……？」

甘く絡む低音とともに、両手で頬を包まれる。

わたしだけを映す瞳は恍惚と潤み、離そうとしない。その姿はまるで運命の再会を果たした恋人のようで、戸惑うしかなかった。

さっきから何ひとつ理解が追いつかない。

グレイン様は人付き合いが難しいほど神聖力が強くて、だから力を吐き捨てる場所を探していて——その器が、わたしだというの？

清潔なリネンに白檀を混ぜたような香りが鼻をくすぐる。それが彼自身の匂いだということさえ、うまく実感できない。

思考は止まっているのに、心臓だけが期待に高鳴る。身体はもう、とつくに答えを知っているみたいだった。

「自分も分かってるやろ？ 俺に触られた所が熱うなって……」

「あ……っ」

耳をカリ、と引っ搔く。たったそれだけなのに、耳全体がじんわりと熱くなつて頭が鈍く痺れる。

「もっと欲しくなってくる」

指が耳から喉にすべって、胸の谷間の上辺りを、トンと小突いた。

「ッひ、あ………？」

……っ？　　っなに、これ……お腹の奥が、きゆうって締まるみたいに疼いて……っ

足の間から熱が溶け出している気さえする。強烈な飢えと甘えが、一緒に
なつて襲つてきている。

「その反応が俺の力を身体が受け入れてる証拠や。普通の人なら弾かれとる
はず」

「――あ……」

髪を掴んでいた父が、いきなり手を離れたことに合点がいった。
グレイン様が「正解」とでも言いたげに目を細める。

「俺の、なんもせんでも溢^{あふ}れてきてしまう力を、これから毎日自分に注ぐ」

今も注がれているのか、胸のところからジリジリとしたものが滲んで、ゆっくりと全身を犯していく。

息が浅くなつて、心臓がドキドキする。ふう、ふう、と息が乱れて立っているのもやっと。まるで発情した獣みたいだ。

「すると自分は俺の神聖力をその身に宿すことができる。するとどうなるか——……賢いイリスは分かるやろ？」

ぼんやりする頭で必死に考える。空っぽのわたしが、歴代最強の大司教の力の一部を身に宿す。頭の中にひとつの仮説が浮かび上がったが、それは到底許されるものではない。

でも、まさか……そんなこと……。

深緑色の瞳が、楽しげに笑いながら真剣に煌めく。秘め事を告げる声は、喉に絡む蜂蜜より甘かった。

「聖女になるんや」

自分が息を呑んだ音がいやに大きく聞こえた。

大きな身体に捕まった身体は、もう上手く動かせない。

下半身が震えて、支えてもらわないと立っていられなかった。

「そうなればもう誰もイリスに手出しできん。もう悲しい思いも、寂しい思いもせんでええ。みんなに大切にされて、ずうっと平和に……俺と一緒にここで暮らすんや」

「でも、わたしは……」

誰かに必要とされて、居ていいと言われて、帰る場所がある人生なんて、一度だって想像したことがない。

だってそれは御伽話の中にしか存在しないのだから。

息が浅い。心臓の音が頭にまで響いている気がする。チラつく希望と重い理性の間で、絡まった糸がゆっくりと解けていく感覚に声が震えた。

「わたし、は……聖女じゃ、ありません。魔力も、神聖力も、ない……から……」

「今はまだ、な」

唇を太い親指が撫でていく。予感が確信に変わっていく高揚感にも似た緊張の中で、深緑色の瞳が瞬いた。

彼の考えが、今自分が想像した通りであるならば、それは決してあつてはならない事だ。もし他人に知られたら無事ではいられない。投獄で済めば万々歳、順当にいけば火炙りの刑。それほど大きな秘め事。

「……でも、それは……国を、神を謀ることに……」

絞り出した声に、彼は満足そうに頷いた。

その反応で仮説が正しい事を確信し、愕然とする。

今は何も無いわたしが、彼の力を得て偽りの聖女になる。それはつまり。

「賢いなあ……そう、聖女のフリをするんや」

「んう……っん、……ッう……」

ご褒美とばかりに、唇に触れる彼の指からまた甘やかな熱が細く流し込まれる。こんな時なのにお腹の奥が疼いて、腰が落ち着かない。支えてくれる腕が少しでも離れれば、無様に腰を揺らしてしまいそう。

「俺と、自分が黙ってたらだあれも分からん。この国では聖女を、ましてや俺を疑うことなんて誰にも出来んのやから」

「っあ」

意識の外にあった耳に唇が触れた。耳孔に淡い息が吹き込まれて、唇が耳

朶を掠める。ゾクツと背筋が震えて、首の裏が痺れる。驚くほど身体が敏感になっていて戸惑うのに、それを上回るほど心地いいことが不思議で仕方がない。

「……な、そうやろ？ 安心し、何があっても俺が守ったる。イリスは俺の大事な大事な器やから……誰にも手出しさせんよ」

「あ……ッあ、あ……う……」

直に流れ込んでくる低い声に意識が掬めとられる。

欺瞞だ。しかし正論を唱える声はあまりに弱い。

渴き切っていた心に染み込んでいく声に、与えられる心地よさに抗えない。知らないうちにわたしはグレイン様のローブにしがみ付いていて、更に深く

抱きしめられていた。

「…………俺は、自分がいたらなんも怖ない。な、イリス…………俺のために聖女になって？」

借り物の力でこの国唯一の聖女になるなんて、そんなことをしていいはずがない。

なのに、役目を与えられたという、気が遠くなりそうな喜びに全身が戦慄く。生まれて初めて必要とされている事実、どうしようもなく惹かれてしまった。

覚束ない手つきで広い背中に抱きついて、とうとう浅く頷いた。

「ふ、あ……ッ」

「ええ子やね。……そう、このまま力抜いてくれたらそれで良い。今日のところはそれで構わんよ」

「っ……あ、今日……は……？」

わたしを軽々と抱いた彼が迷うことなく向かった先は、この部屋で最も存在感がある、あの大きなベッドだった。

柔らかい寝具に寝かされて、これから何をされるか分からないほど鈍くはない。身をよじろうとしたけど、頭の芯まで痺れている身体は言うことを聞かなかった。

「そら、これから毎日するんやから、いつかは自分からも色々して欲しいけ

ど」

「ひ、……ッ……ん、ん……っうあ、毎日……」

「そう、毎日」

「……っこれ以外の方法は……」

「ん——……無いわけやないけど……始めのうちはこっちのがお互い楽やと思う」

それに、と言葉を区切って、さっき生まれ変わったわたしの髪を撫でる。

「自分、俺に触られると疼くやろ？俺もそうやから分かるよ。イリスの事が欲しくて堪らん。本能なんやろか」

ちゅ、と音を立てて頬に唇が吸い付く。挨拶のそれとは全く違うと感じるのは、身体がその先を期待しているから。

……っ♡　こんな……どうして……今までずっと、ずっと……守ってきたはず、なのに……っ♡

生まれて初めて男の人に組み敷かれているのに、どうしてもか全身が彼を求めてやまない。

「……はは。物欲しそうな顔。そんな顔しても、今日はゆっくりしかせんよ。初めてなんやから」

笑われた恥ずかしさに頬が熱くなる。慎みを持たない事を恥じながらも、しゅるしゅると慣れた手付きでドレスを解いていく手には抗えなかった。

「っあ……」

「ほっそいなあ……ここはこんなに大っきいのに」

「やあ……♡ ツふ、う……っ♡」

下着だけになった身体を、視線が舐めていく。

サイズが合わない下着に無理矢理押し込まれたむっちりとした胸の横側を、たぶたと指が弄んで擦る。ぞわぞわ……♡ と背筋が甘く震えて、吐息が乱れた。

「新しい下着も買おな。もっと可愛くて……俺好みのやつ。服は聖女らしい、清楚なのにせなあかんけど……ここは俺しか見んもんな？」

「ひ、う……っあ、……っは、い……♡」

大きな手が下着越しに胸を、ぐにゅ、ぐにゅ……♡ 捏ねて、側面を指で
擦る。

あ、あ……♡ 変な、感じ……♡ ぞわぞわ、する……っ♡
下着と肌の境目をなぞられるだけで、びくんっ♡ 肩が跳ねて、グレイン
様の小さな笑い声が落ちてくる。くすぐったさを煮詰めたみたいな奇妙な感
覚に、何度も目を瞬いた。

「敏感なんやね。もう先っぽもムズムズしてるのと違う？」
「う、あ……、あ……っん♡ ツん、する……っ、むずむ、ず、します……
っ……♡」

手の平で胸を真上から、ぐにゅう……♡ と押し潰されると、下着に乳首が擦れて何とも言えない焦ったさが来る。

っ♡ 洗う時しか触らない、から……っ♡ こんな風に感じるなんて、知らなかった……♡ う♡ う♡ 引っ搔いてほしい……っ♡ むずむず、っらい……っ♡

「ふぁ……っ♡ あッ♡」

「ほな搔いたげよ。下着の上からやと痛くないやろ？ ここなあ……脱がんでもよお分かる、ぷっくり勃ってる可愛い乳首」

「あッう、う……っ♡ あ♡ っんあ、は♡ ッは、あ♡」

かりかり♡ こしゅこしゅ♡

短く切り揃えた爪が、下着越しに甘く食い込む。乳首に溜まったムズムズが細かく弾けて、快感とより強い強い飢えを呼んだ。

「気持ちいい？　すごいなあ、初めてやのに乳首でこんなに気持ち良くなれて」

「あ、ッあ、う♡　っふ♡　ふう♡　ちが、うの……っ♡　ちが♡　あ♡
からだ、っおかし……っ♡」

「身体おかしい？　なんでやろなあ……」

意地悪な声に目を閉じて顎を引いた瞬間、半開きだった唇に何か柔らかい物が触れた。

——…ッ♡ あ、あ…♡ きす♡ キスしちゃ、ってる…♡ ん
んッ!?♡ お♡
びったりと重なった唇の隙間から、ぬる…♡ と舌が入ってきて、その
まま搦め取られる。初めての粘膜同士の接触に戸惑う中、何か熱い物が直接
流れ込んできた。

「ッう♡ んッ♡ う、っ♡♡」
「……は。……ン♡……甘い。思った通り、粘膜接触で渡す方が効率ええな。
触ってる時の何倍も入ってくわ」

口が離れても舌の根がじんじんする。
全身の血が沸いたみたいになつたと思えば、すぐに堪えられないほど

強い飢餓感を呼ぶ。媚薬とはこんな感じなのかもしれない。

お♡ なにこれ……っ♡ は♡ あ、ッ♡ 全身敏感になっ、て♡ もっ
と♡ もっと触ってほしい……っ♡ お♡ 腰♡ はしたなく動いてる……
♡

ぐぐ……っ♡ と腰が浮いて、自分の意識の外でカクカク♡ 動いてしま
う。頭の中は疑問と恥ずかしさでいっぱいなのに、どうしてもやめられない
……♡

「発情期の犬みたいやねえ……、かあい。堪忍ね、こっちの方が都合良
いよ。それにこんなに強く効くのは今日だけやから。……、……多分」
「んああ、あゝゝっ♡ あッ♡ おッ♡ ちくび♡ つやめ♡ あ、あ♡
ッふう♡ ぐー……ッ♡♡」

不穏な言葉と共に恍惚とした目で見下ろされて、恥ずかしくて堪らない。けれど乳首を、かりかり♡ ぴんぴん♡ 引っ搔いて、弾いて♡ されると、胸を突き出して情けない声を上げる事しかできない。

大きな手が遂に下着を剥がして、たぶん♡ と乳房がまろび出た。慎みの欠片も無く勃った乳首が、触って触ってと言わんばかりに主張しているのに。

「おッ♡ あ、っんあ♡ あっ♡ は、ッ♡ うあ、あ……ッ♡ あん♡
ッ♡ うう……♡ ふっ♡ なん、で……え……♡」

「ん？ なんてって、直接触ったら痛そうやん。こないに腫らして……」
「ひ♡♡」

乳輪をくるくるとなぞるばかりで、肝心のところには触れてもらえない。恥ずかしい、恥ずかしい……っ♡ 他人に裸を見せるのも初めてなのに……っ触って欲しいだなんて……っ♡ あっ♡ あ♡♡ 乳輪こしょこしょ♡ つらい♡ つらい……っ♡

布越しに触って貰えてた時の刺激が恋しくて、そんな事を思う自分に驚いて、泣きたくなった。

「うっ……うう……」

「あーあ、泣いてもた。顔真っ赤にして……よしよし、泣かんでもええよ」

ぼろぼろと溢れた涙をキスで拭われる。その間も下乳や乳輪を緩くくすぐ

られていて、頭がおかしくなりそう。

すりすり♡ する♡ こしょこしょ……♡ すり、すり……♡

脂肪の塊だと思っていた胸も、もう軽くなぞって揺らされるだけで感じてしまう。

「んぐ、つぶ……ッ♡ う♡ あ♡ あぐ、う……♡」

背中を反らして胸を突き出して。そうやって震えていると、耳穴を覆った唇が、意地悪く囁いた。

「……なあ、どうして欲しい？ 恥ずかしくて泣いとりだけやないよな？」

「……ッあ……♡」

乳首の側面に、ほんの少しだけ指が掠める。耳に触れる声は笑っているようにも、あやすようにも聞こえた。

「今自分がどこをどう感じて、どうされたいか。素直に言えたら……今よりもっと悦よくしたろ」

「あ……っ、あ、……ッ♡」

耳孔に被さった唇が、ちゅう……♡ と甘い音と共に吸い付いて、背骨から力が抜けていく。抗う気も、羞恥も、力といっしょに抜け落ちてしまった。閉じられなくなった口が、小さな声を出すべく操られたように動く。

「……ッ、……ちくび……♡」

「うん？」

「……ちくび、を……もつと……ッ♡ きもちよく、してください……っ♡」

物欲しそうにぷっくりと膨らんだ乳首を晒して、あまりにも慎みのないお強請りを口にする。

長い銀髪がさらりと流れて、一房頬に落ちてきた。深緑色の目が影の中で満足そうに弧を描いて――

「おッ♡ あっ♡ あっ♡ んあぁあ……ッ♡♡」

ぴんっ♡　ぴんっ♡　くにくに♡　かりかり……ッ♡

硬い乳首を指が何度も弾いて、捏ねるように搔く。

黙っていた刺激が弾けて、今までの何倍も気持ちいい……♡

「イリスは乳首気持ちよかったんやねえ。知らなかったわ。気がつかんでごめんなあ」

「は、ッぐ♡　お♡　あんッ♡　あ、あ♡」

わざとらしい猫撫で声がそう笑って、指の先で乳首を、くりくり♡　こねこね♡　弄り回す。

意識していないのに腰が浮いて、勝手にくねくね♡　動いてしまう。閉じた脚の間が熱くて、むずむずして、じっとしてられない。

「……よいせ」

そんなわたしをグレイン様が見逃す筈もなく、脚の間に男の片脚が滑り込んできた。硬い膝が、ごりゅ……♡ とそこに当たった瞬間「おお♡」とみっともない声が出る。

「うわ、もうここもこんな熱うして。寂しかったんなら、自分で触ってもよかったんに」

「へ、あ……っ♡ あ、お♡ 知らな……っ♡ あ♡ なに、なん……で、え……っ♡」

ぐりぐり♡ 硬い膝が股座に押し付けられると、じわあ……♡ と快感が滲んでくる。お腹の奥がきゅうつと締まって、乳首で感じていたのとは違う気持ち良さに、頭の中は「？」でいっぱいになった。

「知らん？ ……ほんまモンの処女おとめやったか……」

「ん、ん……っ♡ あッ！♡ あ、っああ……♡」

「ほなら、女の子の気持ち良い所教えたろ。ちゃあんと覚えるんやで」
「んう、ッふう、う……っ♡」

にゆる……♡ と舌が唇の間から入ってきて、深い所まで舐られる。唾液にもグレイン様の力が存分に含まれているようで、あつという間に意識がとろけた。

「……っへ、あ、あ……♡ はっ♡ あっ♡ んお♡」

「もうとろとろやね。どこを俺に触られてるか、ちゃんと意識しててな」

「ッあ♡ あ、うっ♡ やあ……っあ♡ なに♡ んああ……っ♡」

下着の中に大きくて硬い手が滑り込んできて、長い指が泥濘んだ溝を撫で上げる。

っあ♡ あ♡ なに♡ そんなところ……っ♡ あ♡ おなか、きゅんきゅんして、……っ♡

ぬぢゅぬぢゅ♡ 行き来した末に、硬い何かを、ぐぢッ♡ 弾かれて強過ぎる刺激に大きく目を見張った。

「おッ!?!♡」

「はは、大っきい声。ここ気持ち良いやろ。女の子の身体でいっちゃん気持ち良いとこやもんなあ」

「へっ♡ あッ♡ あッ♡ 待っ♡ まって♡ うあ♡ あッお、♡ ツんう、つく♡」

ぬちゅぬちゅ♡ ぐち♡ ぬぢゅぬぢ♡ くちゅくぢゅ……♡

撫で回されるほど敏感になって、そこが膨らんでいっているような気さえする。

あ♡ あ♡ なに♡ こわい♡ びりびり止まんない……っ♡ 刺激強すぎ、て♡ お♡ ツ♡ おかしくなる……ッ♡♡

何が起きているのかも分からないのに、快樂だけが刻み込まれていく。嫌

々と首を振ると、愉しそうな声がそれを笑った。

「待つて欲しい？　なんで？　こないにクリ勃たせて、まんこもいっぱい濡らして、よお啼いて……気持ち良さそうやよ？」

「んああッ♡　わか、んな……っ♡　あッ♡　あうッ♡　こわ、い♡　ッお、あ♡　っぐう……ッ♡♡」

今まで感じた事のない強烈な刺激に、身体が言う事を聞かない。

何かに縋っていないと怖くて、夢中でしがみ付いたのはグレイン様のローブだった。

「怖い？　……まあ、今だけやろ。大丈夫、大丈夫。そのまま捕まってるえ

えよ。俺の手えでおかしなるとこ見せてな」

「ひッ♡　っうう……ッ♡　んお♡　はっ♡　はぁッ♡　ん、くうう〜
……ッ♡♡」

ぬぢゅぬぢゅ♡　膨らんで敏感になったそれを前後に嬲られて、どんどん腰が浮く。ぽとぽとと蜜が垂れていくのさえ気持ちいい。

お腹の奥……っ♡　切なく、♡　気持ちいいのに、なんで……っえ……♡　ッあ♡　あ♡　なんかくる……っ♡

絶え間なく与えられる刺激が溜まりに溜まって、今にも弾けそう。ぎちりと身体が嫌な軋み方をして、きつく目を閉じた。

「腰ビクビクさして……もうイきそうなんやねえ。イリス、こっち見て。そ

う、誰にイカされるんか、ちゃんと見てな」

「ッんお♡　ッあっ♡　あ♡　グレ、インさま……っ♡　ひ♡　あ♡　ッく、うう……っ♡♡」

びくびくッ♡　びくん♡　がくがく……っ♡

なに……っ♡　これ♡　指の先まで……っびりび、り♡　痺れて……っ♡　お♡　しゅご、い……っ♡♡

全身が強く震えて、気持ち良いのが一気に弾ける。頭が真っ白になって、視界はチカチカと眩んで上手く焦点が合わない。

「こら、ちゃんとこっち見て」

「は♡　は……ッああ！♡　ッお♡　お♡　お……ッ♡♡」

こつんと額同士が当たって、間近にグレイン様の整い過ぎた顔が迫る。艶やかな銀髪にわたしまで囲われて、本当に彼の事しか目に入らない。

「इटたばかりで敏感なクリトリスを、ぬぢゅぬぢゅ♡ くるくる♡ 優しく撫で回されて、受け止めきれない快感に品の無い声が漏れる……♡」

「クリトリス気持ち良いなあ？ ここ、パンパンに腫らして……もう指も入れて大丈夫そうや。ゆっくり息吐いて、気持ち良いのだけ追っかけて。……出来るな？ イリスは賢くて良い子やさかい」

「ふー……っ♡ っお♡ お♡ ツんあ、ああ……♡ ツい、う♡ ああ……ッん♡ ん♡ ツゆび、入っ……♡」

「そうそう、上手やなあ……。中も掻いて欲しくてしんどかったやろ？」

ぬぢぢ……っ♡ 指がぴったりと閉じていた筈のそこに入ってくる。異物感が気持ち悪かったのはほんの一瞬だけ。充分すぎるほどに濡れたそこは、驚くほどすんなりと指を受け入れた。

「ふ、ッう♡ はっ♡ は、ああ♡ あ♡ つぁ♡」

「啞えただけでこないに締め付けて……もうちょい広げんと無理やなあ。痛いイヤやろ？」

ぬぢぬぢ♡ ゆっくりと掻き混ぜられると、背中がゾクゾク震える。長い指は奥の方まで届いて、欲しかった所をぐりぐり♡ 潰してくれる。

あ——……♡ あ♡ 熱いの、じわあ……っ♡ 滲んで♡ お腹きつい

のに♡ きもち……、い……？♡

「ええ顔なってきたなあ……ぐちゅぐちゅ音なってるの分かるか？ まんこでも気持ち良くなれて偉いなあ。ご褒美あげよか」

「へ、あ……？♡ あ、ッ♡ ンお♡ ッお♡ いっ、しょ♡ だ、め……
ッ♡♡」

ぐちゅぐちゅ♡ ぐりぐり……♡

ぬちゅ♡ ぬちぬち♡ ぬちゅぬち……ッ♡♡

長い指がおまんこの中を搔いて、親指がクリトリスを撫で潰す。

お♡ つお♡ これだめ♡ 下品な声出ちゃう♡ はじめてなのに……っ

♡ おまんこ♡ 気持ちよくなっ、ちゃ……ッ♡

覚えたての快感を同時に与えられて、なす術もなく声を上げた。

「おッ♡ おお♡ つぁ♡ はえ♡ んおお♡♡」

「ン、かあいいなあ……誰にも聞かせられん声やねえ……ええよ、俺しか知らんもんな？ だって聖女が処女やないなんて……誰にも言えんもんなあ……♡」

「ひ、ッう♡ ンお♡ ツあ♡ ああッ♡ ごめ、なさ……っ♡ あ♡ あ
ぐうっ……ッ♡♡」

耳元で、くすくすと笑いながら囁かれた言葉に全身が痺れるほど熱くなった。抱えたばかりの秘密の大きさが絶大な背徳感となつて襲つてきて、ぐぢゅぐぢゅ♡ 虐められて快樂にすり替わる。

「謝らんでええよ。俺と自分の……二人だけの秘密なんやから。イリスはただこうやって気持ちよおなって、俺を受け入れて……みんなに敬われて大切にされて生きたらええのや」

罪悪感さえ飲み込む甘い声。都合の良い言葉が毒のように染み込んで、もっと気持ち良くなる……♡

きもちい♡ きもちい♡ クリなでなで♡ きもち♡ だめなのにつ♡
あッ♡ ああ♡ いくいく♡ またイッちゃう……ッ♡♡

ぶるる……っ♡ 大きく震えた身体を仰け反らせて、込み上げてくるアクメ感に身構える。熱い吐息が顔に掛かって、きゅんっ♡ と指を締め付けた。

「ツく♡　いくっ♡　ツきゅ、ううう〜♡　♡」

びくん♡　♡　びくびく♡　♡　がくがく……♡
へこ♡　へこ……♡　ぬぢゅ……♡　ぐち……♡

「よしよし、ええ子やねえ。上手にイけて偉い、偉い。腰へこへこするくらい気持ち良かったんやなあ。ナカもとろとろなって……これなら大丈夫そうやね」

「んあ……♡　♡　へ、え……っ♡　♡　は……♡　あぁ……♡」

ぬる……♡　♡　指が引き抜かれて、ついだとばかりに下着も剥ぎ取られる。触らなくても分かるほど濡れていて、お漏らしをしてしまったみたい……♡

「よい、せ……と。……ふふ、とろとろやね。ちよおキツいかもしれんけど……堪忍ね」

「あ……♡ ん……っ、は、い……っ」

長い指が、にゅぱ……♡ とおまんこを拡げる。ひくひくと震えているのが、目を閉じていても分かる。

あ……♡ すご、い……当たってる……♡ 熱い♡ 思ってたよ、り、おつきい……♡ こわい♡ おちんぼ、怖い……♡

ぬぢ♡ ぬぢ♡ 押し付けられる熱の塊は重くて、本当に入るのか不安になってしまう。だって知識としては知っていても、見た事さえないのだから。けれど身体はそうじゃないみたいで、空っぽになったナカが切なく窄まって

もどかしさが募る。

「イリス」

「ふぁッ♡」

べちッ♡ 無防備なクリトリスを熱いソレで叩かれて目を見開く。

見上げた先には、にい……と口角だけを上げて笑うグレイン様が居た。

「目え開けてなあかんやろ？ 誰のちんぽで、どうやって犯されるんか……
ちゃんと見てな」

「おッ♡ あッあ、う♡ ごめ、ッなしや……ッ♡♡」

べちっ♡ べちんっ♡ 剥き出しのクリトリスを何度も逞しいおちんぽで
ビンタされて、腰がびくっ♡ びくっ♡ 恥ずかしいほど跳ねる。涙が滲む
ほど強い刺激なのに、浅ましく悦んでしまう……♡

「そやな、それはごめんなさい、やな？」

「んっ♡ んうっ♡ ふあっ♡ ご、めんなさっ♡ あっ♡ お♡」

「——……あー……あかんわ。その顔ゾクゾクする。かあいいなあ……堪ら
んわ」